

Contemporary Space Organization of Earthen Dwellings in Inner Mongolia Section of the Yellow River Basin

ソン, ジンイン

<https://hdl.handle.net/2324/7363556>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名：SONG JINGYING

論 文 名：Contemporary Space Organization of Earthen Dwellings in Inner Mongolia Section
of the Yellow River Basin

(黄河流域の内モンゴル区間における「生土」住宅の空間構成に関する研究)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

生土を建材として用いることは古来の建築技術の一つであり、現在でも土造住宅は世界の住宅総数の約 10%を占めている。黄河流域の内モンゴル区間では、生土住宅は伝統的な住居形態として、地域住民の日常生活に深く根ざしてきた。一方、近代化の進展に伴い、伝統的な生土住宅は 2 つの重要な課題に直面している。一つ、現代のライフスタイルの変化により、住民の日常生活の新たなニーズを満たすため、伝統的な住居は自発的な空間整備を余儀なくされている。もう一つは、多くの生土住宅が新しい建築材や近代的技術で建設された住宅に取って代わられており、地域の生活行動や住文化に大きな影響を及ぼしている。また、黄河流域の内モンゴル区間における生土住宅の空間変遷は、伝統的な住宅が現代の生活にどのように適応しているかを理解するための貴重な素材でもあると考えられている。

そこで、本研究では黄河流域の内モンゴル区間における生土住宅を対象とし、現在使用されている生土住宅の空間構成を分析し、これらの住宅が外部要因の変化にどのように適応しているかを調査分析し、黄河流域の内モンゴル区間における生土住宅の空間構成を明らかにすることを目的とする。さらに、更新された住宅空間と従来の生土住宅を比較することで、これらの住宅の改修前後における空間構成や生活行動の変化を検討したうえで、地元的生活文化に適応した住宅設計に向けた知見を得ることを目指す。

本論文は 5 章で構成されている。

第 1 章では、研究の背景、目的、論文の構成を示すとともに既往研究及び本研究の枠組みについて述べた。

第 2 章では、黄河流域内のモンゴル区間に所在する 52 例の生土住宅を調査対象として選定した。その空間タイプを分類するとともに、これらのタイプが時間の経過とともにどのように変化してきたかを明らかにした。その結果、現代の生土住宅においては、複数部屋を有する空間構造が好まれる傾向があり、特にカン（炕）・ストーブと寝室、ダイニングルーム、リビングルームの組み合わせから成る複合的な基本生活空間が特徴的であることが判明した。また、機能空間に関する分析では、現代の生土住宅が収納機能および生産機能を優先していることが示された。一方、近代的家具や家電の導入により、従来の日常活動は独立した空間へと分離される傾向が見られた。また、新たに創出された空間については、日常的な利用が十分に進んでおらず、新しい居住習慣がまだ定着していないことが確認された。次に居住空間のタイプと機能空間の関係性を検討した結果、居住空間のレイアウトが空間利用に直接的な影響を与えていることが明らかとなった。

第 3 章では、生土住宅の空間つながりを明らかにするため、現代の生土住宅における空間の配置

特性と利用習慣に焦点を当てて、スペースシンタックスを用いて、空間の接続性に基づく空間配置の特徴を分析した。この分析ではインテグレーション及びミーニング・デプスを評価指標として分析した結果、ストーブが他の内部空間と密接に結びついており、その配置が空間使用の利便性を高めていることが示された。さらに、カン・ストーブ空間が現在でも生土住宅の空間配置および日常活動の中心的な役割を担っていることが明らかとなった。

第4章では、改修された7つの生土住宅を選定し、その空間構成と配置について分析を行った。伝統的な生土住宅と改修後の住宅の空間構成を比較した結果、改修後の住宅では変化が見られるものの、依然として伝統的な生土住宅の基本的な機能空間が維持されていることが確認された。特に収納機能および生産機能が引き続き重視されていることがうかがえる。さらに住宅設備などの導入によって新たな機能空間が創出されたが、調査対象のサンプルからはこれらの新空間に対する明確な需要の高まりが示されなかった。また、室内空間構成の中心がカン・ストーブ空間から寝室、ダイニングルーム、リビングルームへと移行していることも明らかにした。

第5章では、本研究で得られた結果を総括し、考察を加えてまとめとしている。黄河流域の内モンゴル区間における生土住宅は、生活様式の変化に対して空間構成を効果的に適応させていることが明らかとなった。特に伝統的なカン・ストーブ空間を中心とする構成を維持しつつ、生活スタイルの多様化に対応した空間構成の変容が観察された。この変容は住民の生活様式の変化を反映しながらも、伝統的な生活行動が一定程度維持されていることを示している。これにより生土住宅が有する強固な文化的背景と空間適応性があるとうかがえる。